



南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第12号

令和8年2月27日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>

「優しい先生」「優しい親」そして…

～ 私たちが担うべき「子ども」に対する責任～

校長 関根治彦

「優しい先生」「優しい親」…子どもにとって、そう感じられる大人はとても好きな存在であると思います。でも、時には心を鬼にして「厳しい先生」「厳しい親」でなくてはならない時もあります。

私、教師1年目のとき、いろいろなクラスを見学させてもらっていました。ある時、学級活動の時間で、「りんごっ子雪まつり」で作る雪像を決める活動を見せていただきました。そのクラスは雪像付きの滑り台を作ろうとしていましたが、その設計図に描かれた雪像はどう見ても、角の生えた担任の先生です。「〇〇先生、オニみたいだね。」と言うと、その学級の子どもは「関根先生。“みたい”じゃなく、オニだよ、オニ。すごく厳しいんだよ。」と笑って話してくれました。その時、教室の端からその先生が「何？何を関根先生に言っているの？」と声が掛かりました。その子は笑いながら「先生が美人だと言っていました。」と答え、「そう、それならばよし。」とその先生も笑いながら返していました。

放課後、その先生から私は、「大村はま」という教諭の書いた何冊かの本を「読んでみなさい。」といただきました。

…「今、ここで厳しく指導しなければ、今後この子どものためによくない！」そう判断した時にはしっかり厳しい大人でなくてはなりません。私たち教師が子どもを厳しく指導する時、必ず守らなければならないことがあります。暴力や身体に苦痛を与えることになる「体罰」は言うまでもありませんが、「いつも、どの子にも、同じ基準で、やってはいけないこと、やるべきことをしっかり伝える。」ということ。そして、「できたとき、守れたときにはそれをしっかり認める。」ことです。「こういう時は必ずしかる。こんなことは絶対許されない。」それが子どもにしっかり伝わり、なぜそんな時に先生はしかるのか、意味が理解できていれば、それは「信頼」につながります。困ったときに力になってくれる大人であると感じてくれます。しかるときも「何のために、誰のために」であるのかが子どもに伝わることが大切です…

ところが、しかる内容が、時によって違うことや、同じことなのにしかられる場面とそうでない場面があると、子どもは、その厳しさは、自分たちのためであるとは感じなくなってきます。「気分で怒っている」と感じます。「信頼」を生む「厳しさ」ではなくなってしまいます。「自分のこと、みんなのことを思ってくれている。」そんな愛情をしっかり伝えることができないと、せっかくな心を鬼にしてしかっていても意味がありません。大切なのは諦めずにコミュニケーションを取り続けようとする事です。その時々によって「まあいいか…」とになってしまうとそれは「優しさ」ではなく「甘さ」と感じます。なぜそんなことをしたのか、なぜそういうことになったのか、子どもの声に耳を傾け、しっかりと寄り添おうとしなければ、それは子どもにとって「厳しさ」ではなく「冷たさ」となります。

「優しい」に対応する言葉は「厳しい」

「甘い」に対応する言葉は「冷たい」

あのときの先生のように「厳しいけど優しい…」そんな大人でありたいと、自戒の念を抱きながら…。